星新一の不思議な世界

高野敦志



目次

はじめに

　星新一はショートショートという分野を確立した作家である。『ボッコちゃん』『きまぐれロボット』『未来イソップ』が、文庫本で手に入る売り上げベスト３の短編集である。

　映像化が難しいと言われた星新一の作品だが、今世紀になってからＮＨＫでドラマ化やアニメ化がされるようになった。本書ではまず、二〇二二年に放送された『星新一の不思議な不思議な短編ドラマ』から、ドラマの概要と感想を記すことにする。毎回十五分を俳優が演じた番組であり、物語の面白さとともに、演技を楽しむことができる。全十八話、うち二作は前編・後編で構成された全二十回の放送だった。

　ＮＨＫで二〇〇七年から二〇〇八年にかけて『星新一ショートショート劇場』で放送されたもののうち五十編が、二〇〇九年に『星新一ショートショート』というタイトルで、五枚組のＤＶＤの形でハピネットより販売された。僕が見たのは放送ではなく、ＤＶＤ版の方である。アニメが三分の二、俳優が演じたドラマが三分の一である。一作品あたり数分で終わるので、原作の粗筋（あらすじ）をなぞっている程度のものが多い。俳優によるドラマの方が面白い物が多い。アニメに関しては、表現のタッチが簡易なものと、リアルで細密なものに分かれる。なお、それらの一部は、『星新一の不思議な不思議な短編ドラマ』でも映像化された。タイトルが重複する物に関しては、最新のシリーズの末尾にコメントを記すにとどめた。

二〇一〇年、新春スペシャルとして、『星新一ショートショート劇場』の新作六編が放送された。これはＤＶＤ五巻の中には収録されていない。かつて個人的に録画しておいたものを、今回改めて見直した。

ＮＨＫが映像化したもの以外に、Yahoo! JAPAN内のサイトで無料配信されたアニメが、『きまぐれロボット』のタイトルでＤＶＤ化された。一話あたり二分の小咄（こばなし）といった内容である。これに関しては、アニメの内容以外に、連想した事柄についても触れることにした。

それ以外に、星新一の原作をもとにしたオリジナル・ストーリー『きまぐれロボット』がＤＶＤで発売された。これは浅野忠信主演のドラマであり、四十分ほどの本格的な映画である。

二〇二二年十二月五日

高野敦志

ボッコちゃん

僕は日本語教師を長年やってきた。星新一の文章はやさしいから、教材として取り扱ったことがある。とりわけ「ボッコちゃん」は、東海大学の中級日本語教科書に収められており、教材として扱われた先生も多いことだろう。僕の場合は、卒業式の出し物として、外国人の学生に演じさせたから、思い出深い作品となっている。

星新一の作品にはよくロボットが登場するが、華麗な雰囲気と悲惨な結末のコントラストがよく効いており、ショートショートの代表的な作品となっている。

このドラマに登場するホステスのロボットは、水原希子（みずはらきこ）が演じている。美しい女性であり、かつロボットのたどたどしい語りをよく演じている。ボッコちゃんにはＡＩが入っているんだろうが、半世紀以上前のかなり初歩的な機能しか持っていない。相手の問いかけに、鸚鵡（おうむ）返ししているに過ぎない。にもかかわらず、女性の笑顔で語られると、男たちは心を奪われてしまう。有名人そっくりのロボットが画面に現れると、本物が出ていると思い込む国民は、「ボッコちゃん」のバーに通う常連客と同じである。

凶行を起こす青年は、ボッコちゃんに入れあげて、家の金を盗もうとして、父親にこそ泥と罵（ののし）られた挙げ句、別れの夜にボッコちゃんに毒薬を飲ませる。毒薬はボッコちゃんの内部を

通るパイプから回収され、店のマスターや他のホステス、お客たちの口に入り、大量毒殺事件を引き起こす。

　現場に戻ってきた青年は、惨劇を目にしながら、ボッコちゃんが無事だったのを見て「よかった」と口にする。この青年は人間らしい感覚を失っているという点では、すでにロボット化している。最近の無差別事件を引き起こす若者と、大して変わらないのである。

　結末は悲劇なのだが、美しいボッコちゃんの表情と、相手の言葉を反復するコミカルな台詞（せりふ）のおかげで、事件の悲惨さはそれほど心に衝撃を与えない。

　なお、「ボッコちゃん」のアニメ版は、描画が単純すぎるし、原作の粗筋をたどっているだけなので、それだけ見ても面白さ

は伝わってこないかもしれない。

生活維持省

　この作品は陰惨で、後味悪さが付きまとってくる。平和な生活を維持するために、ランダムに選ばれた人が、生活維持省の役人に射殺されるからである。有名画家や結婚を前にした娘が、人口削減の対象に選択されて抹殺されるのである。
　これは現在の世界の支配層の考えを、先取りしたような内容である。治験中のワクチンを半強制的に国民に接種させる。その中には偽薬の生理食塩水とともに、特に濃度が濃い物も含まれる。それを注射された国民は、脳卒中や心筋炎、癌、免疫不全などで死亡するのである。
　ロシアンルーレットをさせられているのに、情報弱者である国民は、自分や家族の命を守りたくて、恐ろしいワクチンを接種してしまう。人口削減計画を予告したような「生活維持省」に、背筋が寒い思いをしたのは、僕だけではないだろう。
　なお、この作品は以前、アニメ化されているが、数分のごく短い映像であり、エッセンスのみを提示した形なので、作品にのめり込む余裕がない。

不眠症

頭を打った男が不眠症になる。枕を替えても、酒を飲んでも眠れず、数ヶ月不眠症が続いている。医師の診断を受けると、眠れないのならその時間を有効に活かせばいいと言われる。そこで、男は二十四時間働くようになる。

ところが、恋人とホテルに行っても、相手が眠っている間も自分は起きている。言いようのない寂しさに襲われ、ふたたび医師のもとを訪ね、どうにかして眠らせてほしいと言う。非常に高価な薬を注射してもらったのに、眠ることができないと不満を述べる。

すると、医師は「あなたはずっと眠り続けて、今ようやく目

が覚めたのだ」と答える。膨大な治療費を要求されて、男はパニックに陥る。普通のひねりだったら、そこで終わるわけだが、このドラマではもう一つひねりが入る。目覚まし時計が鳴って、本当に目が覚めると、今までのすべてが夢だったことが分かるのだ。

星新一の短編はブラックユーモアが多く、「ボッコちゃん」でも「生活維持省」でも死が関わってくる。眠れない男が眠りを求めて、永遠の眠りにつくのかと予想したのだが、見事に外されてにやりとしてしまった。

以前のドラマ化では、不眠症を医師に訴え、高価な薬を飲んで目覚めたところ、事故以来眠り続けてようやく目覚めたとして、膨大な治療費を請求された場面で終わっている。

地球から来た男

産業スパイだった男が捕らえられ、未知の星にワープさせられてしまう。男が来た星は地球によく似ており、地球に残してきた妻子そっくりの家族もいる。

男は地球への恋しさが募り、自分をワープさせた会社に乗り込み、地球に戻すように懇願（こんがん）するが相手にされない。普通なら、地球以外の星にワープさせられたという前提自体がおかしいと気づくはずだ。捕まえた産業スパイを脅かして、車で郊外に連れていっただけだと。

地球そっくりの星に送り込まれたという前提を、かたくなに守り続けるために、男の妄想は膨らんでいく。「本当はここに

いるべきではない」という疎外感を、誰もが一度は抱いたことがあるから、男に共感できるのである。

さらに、前提を補強するために、その男と同じように、地球から来たと信じ込んでいる税務署の男が登場する。疎外感を持つという点で共感し合うことが、唯一の救いとなるのである。

なお、以前にドラマ化された物も、長さは多少短いものの、印象の上では大差はない。ローカル線で通勤したり、家が一戸建てだったりといった小さな違いはあるが。

善良な市民同盟

　職場を荒らしてとんずらしていた男は、不良物件を売り付けに金持ちの老人の邸宅を訪れる。そこで男は、老人から善良な市民同盟に入るように促される。悪人を駆逐するために、体の水分が抜けて死に至る病原菌をばらまくので、予防接種をした者しか、審判の日には生き残らないというのだ。唯一の条件は、その団体について他言（たごん）しないということだった。
　男は善良な人間に生まれ変わり、愛する女性との生活も始めるが、審判の日に彼女が恐ろしい病原菌に冒されるのではという恐怖が募（つの）る。ついに、他言しないという約束を破り、彼女にも予防接種をしてほしいと頼み込むが、老人は約束を守らなか

ったとして、男を団体から追放する。
　結果的には、審判の日は訪れず、善良な市民同盟という団体も、悪徳商法でもうけていたことを知る。ただ、その団体に知り合わなければ、大切な彼女とも出会えなかったわけで、団体に関しては両義的な意味合いを含ませている。
　疑問に思ったのは、ばらまくとされた病原菌は、果たして存在していたのかということ。また、予防接種だとして打った成分は何だったかということだ。プラセボの生理食塩水を打っていたのかもしれない。
　正義のために、伝染病のウイルスをまくというのは、地球環境を守るためには人口削減が必要で、新型コロナウイルスを散布する一方で、治療薬のアビガンやイベルメクチンを、市民か

らは隠そうとする支配層の独善性を想起させる。新型コロナウイルスの場合も、恐ろしい伝染病という触れ込みだったが、結果的には弱毒化して、普通の風邪と大して変わらなくなった。重症化しているのは、ブースター接種をして、自分自身の免疫が抑制されてしまった人ばかりである。

逃走の道

宝石類を盗んだ二人組は、駅構内に逃げ込むが、すでに警察の手が及んでいるのを知って、停車中の車両に乗り込む。トイレに潜んでいると、おもむろに列車が走り出した。しめしめ、これでうまく逃げ切れると思ったのだが、どうも車内がおかしい。乗客が無口で身動き一つしていないではないか。

何と、乗客はすべて人形だったのである。他の車両も、運転手までもが。だとすれば、この列車はどこへ行くのか。止めることはできるのか。とんでもない列車に乗り込んでしまった！

猛スピードで突進する列車は、ブラックホールに呑み込まれるようである。

止まらない夜行列車というのは、典型的な悪夢の一つである。行き先は別世界、あの世だろう。ホラー小説じみた流れを感じたわけだが、作者はそれに現実的な裏付けを与えることで、読者に一泡吹かせるのである。

この列車は鉄道事故を想定した実験で、まもなく急停車して損傷するだろう。乗客がみな人形だったのは、事故によって人体がどのような打撃を受けるか見るためだったのだ。直前で幕を下ろしたのも秀逸である。

この作品は以前もドラマ化されているが、上映時間は数分であり、切迫した空気のみを伝えている。これだけ引きつける内容なのに、あっという間に終わってしまう。それが再ドラマ化された理由だろう。

見失った表情

その頃、整形手術では満足せずに、表情操作機というナノマシンを埋め込むことが流行していた。ただ、表情操作機は違法だったので、発覚すると検挙されてしまう。

とはいえ、違法とされた根拠は不明である。機械で操作した表情を見せるのは、人を騙(だま)すことになるからか。表情操作機には依存性があって、いったん使用すると自身で表情を作ることができなくなるからか。

整形したが、表情をどう作るか分からず、独身のまま過ごすのが耐えられなくなったヒロインは、違法と知りながらも表情操作機を打ち込んでもらう。

街中で偶然、大学時代の男友達と出会う。彼は彼女がこんなに表情豊かになったのに驚く。やがて、二人は互いに慕い合うようになるが、表情操作機がエラーを起こしてしまう。操作機を使っていたことを、彼に知られてしまうが、表情をうまく作れなくても、今の気持ちをそのまま顔に出すように促される。

表情操作機に頼らなくても、自分なりの表情を見せることで、二人は関係を深めていく。だとすると、表情操作機には依存性はなく、禁止する法的な根拠もないことになる。星新一の物語には珍しく、ハッピーエンドとなる。

なお、以前のドラマ化では、表情操作機をうまく使いこなせなくなったヒロインが、パニックとなって泣いてしまった姿が、表情操作機の捜査をしていた旧友の心を動かし、二人は結ばれることになる。細かな設定が異なるが、それはそれで味わい深い仕上がりとなっている。

薄暗い星で

木星の近くには、未知の惑星があるらしい。荒涼とした地表には、海もあるようだが。そこに流れ着いた二体のロボットが、肩を並べて語り合っている。

　地球で人間に使われたロボットは、不要になると宇宙空間に遺棄される。本当なら地上で処分されるべきなのだろうが。ロボットに感情移入してしまう人間には、それができないらしい。飼えなくなった犬を、保健所で殺処分せずに、野良犬として放置するように。宇宙空間に遺棄されたロボットの多くは、太陽に呑み込まれて焼かれるが、一部はこれらのロボットのように、薄暗い星にたどり着くのである。

　この惑星はロボットの姥捨て山である。ロボットは地球での生活を懐かしみながら、残されたわずかの時間を生きる。この星の大気には金属を腐食する成分が含まれるので、長くは生きられないのである。

　地球のご主人様にいただいたオルゴールが、悲しい音色を奏でている。たどり着いた二体のロボットを慰める物は、原子的な自動機械オルゴールぐらいしかない。それを手にしたロボットは、持った手がもげてしまう。腐植による死は意外に早く訪れた。もう一体のロボットも目から涙が流れてくるが、これも腐植の始まりだった。

　どんなにこき使われても、ロボットにとっては、人間に必要とされた地球での暮らしが幸せだったのである。二体のロボッ

トが腐食して動かなくなると、この星の薄暗い光も、冷たい波の音も聞く者はいなくなる。新たに廃棄されたロボットが流れ着くまで。

白い服の男

世界大戦が終息した後、二度と戦争が起こらないように、戦争の「せ」の字も発言することは禁止される。正義の名の下に、言葉狩りが行われているのである。

特殊警察の隊員は、青空に白い鳥の腕章をつけている。ＳＮＳの某企業のロゴにそっくりである。電話の盗聴が行われ、戦争について口にしただけで、逮捕の対象となってしまう。戦争について知りたくて、新聞記事をかばんの中に隠し持っていただけでも連行される。

逮捕された者は金属棒で殴られ、拷問（ごうもん）を受ける。有罪になると、木に鎖でくくりつけられ、晒（さら）し者にされた後に処刑される。

平和の名において、いかなる弾圧も許されるのである。極限に達すると反転する陰陽の原理が、ここでも働いている。
　歴史の書き換えが行われ、それができない本は焚書にされる。現実の社会においても、世界の歴史は改変されていると言われる。人類は何度も絶滅の危機に瀕したらしいが、この物語はそれを暗示しているのではないか。
　最後の場面で、子供たちが戦争ごっこをしているという情報がもたらされる。隊員が急襲した後に、銃声が鳴り響く。子供たちは「戦争」というタブーを演じたかどで、射殺されたのである。

ものぐさ太郎

これはパロディーである。『お伽草子』の「物くさ太郎」も、小屋の中で寝っ転がっている怠け者だが、ひょんなことから上洛し、働き者となる。和歌の才があることを見抜かれ、風呂で丹念に垢を落とすと、たぐいまれな美男となる。帝に拝謁すると、仁明天皇の末裔であることが分かり、甲斐と信濃を賜って、子孫も繁栄したという話。
　星新一の「ものぐさ太郎」は昭和時代の怠け者で、父親の遺産で食いつないでいたが、政界の黒幕と幼なじみだった老人と知り合い、声帯模写の技で、次々と人を騙して金儲けをし、ついには世界経済を左右するまでになったという話。

パロディー、二次創作というものは、元の話をなぞりながらも、主題をすり替えたり、価値感を引っ繰り返して、全く別物の、自立した作品を生み出すというもの。星新一の「ものぐさ太郎」は『お伽草子』のあらすじをアレンジして、欲望の権化となり果てた怪物を描き出したのである。

窓

テレビに登場する芸能人そっくりのヒロインは、派遣社員をするかたわら、ＳＮＳに自撮りした写真を掲載し、ちょっとした人気者になっている。

ある夜、部屋でテレビを見ていると、密室に閉じこめられ、助けを求めて絶叫している女性が映し出される。何て下手な演技だ、自分ならもっと上手にできると、ヒロインは言い放つ。

彼女は帰りの夜道で、黒い服を着た男に「テレビに出てみないか」と声をかけられる。そのときは決心できなかったものの、二回目に喫茶店で会ったときに、よろしくお願いしますと答える。

日が暮れてから、男の車に乗って、テレビ局のスタジオに向かう。男は「本当にいいのか、テレビの世界に足を突っ込んだら、なかなか抜けられない」と念を押すが、ヒロインは男の後ろについて、スタジオだという怪しげなビルの地下に降りていく。

ようやくヒロインは、騙されたことに気づく。男を悪魔のようだと罵（ののし）るが、男は悪魔そのものであると語る。スターとして光り輝く者がいるのは、闇の世界の犠牲者がいるからで、光と闇のバランスを取るのが悪魔の役割だと。

悪魔はドアをすりぬけて出て行ってしまう。ヒロインは壁の一部に窓を見つけて、向こう側にいる人に助けを求める。これはちょうど、ヒロイン自身が以前、テレビで見た女性が絶叫す

る場面に照応している。

この窓こそが、テレビという存在である。テレビに映っているのは、非日常の光と闇の世界なのだ。光の部分だけに魅せられて、芸能界に志願する若者の多くには、悲惨な人生が待っている。

たとえ、芸能人としてヒットしても、テレビで見られる光の世界の裏で、どす黒い世界が日常で待っている。政治家の慰み者にされるだけならまだましで、悪魔に魂を売る誓いをさせられ、幼児を生贄（いけにえ）にする儀式に参加させられ、死後には地獄が待っている。それどころか、人気絶頂中に舞台から引きずり下ろされ、人道に対する大罪を犯したとして、秘かに死刑に処される者さえいるという。

なお、この話はかつて『星新一ショートショート』のシリーズでドラマ化されている。ただ、ごく短い演劇形式で、舞台装置もシンプルなので、『星新一の不思議な不思議な短編ドラマ』の「窓」のような迫真性、恐怖感は伴わない。

凍った時間

放射性の薬品をかぶってしまった主人公は、脳以外を機械に交換したサイボーグとなる。人間の意識は持っているが、普通の人間だった頃の肉体的な感覚は失ってしまったのだ。外見はロボットのようなので、人々からは白い目で見られ、耐えられずに地下室で暮らしている。感覚がなくなったといっても、夢の中では苦痛を感じているのだが。

ある日、テロリストが空から神経ガスをまく。それによって、街中の人々は意識を失い、路上に倒れ込んでしまう。停電と通信不能によって、何が起きたかと外に出た主人公は、防毒マスクもせずに、人々が動きを止めた大通りを進んでいく。

テロリストは神経ガスをまくとともに、それを解毒する薬品も発明していた。人々が意識を失っている間に、国家を乗っ取ってしまい、人々が逆らっても、神経ガスを再びまくと脅す計画である。それを聞いた主人公は、許せないという人間らしい正義感で、テロリストのリーダーを射殺する。

　主人公は人々が凍ったように動かず、意識を失っているのが耐えられなかったのだ。ところが、意識を取り戻した人々は、以前と同じように、彼をいかがわしいサイボーグとしてしか見ない。

　現在、世界各国のリーダーは、ムーンショット計画という、人間改造の陰謀を企んでいる。本人を室内にとどめておき、アバターやロボットに行動させるというものである。人間は脳の

みが活動するサイボーグとなる。肉体労働者も不要になるので、世界の人口を五億人程度に削減しようとしている。

　スペイン風邪も新型コロナウイルスも、支配層がまいたウイルスであり、それを予防するワクチンや治療薬とセットで開発された物である。それによって、ムーンショット計画を実現させるための人口削減を行うのである。

　星新一の「凍った時間」は、数十年前に現在世界で起こりつつあることを予見していたのである。支配層は空中から毒をまいて、予防するためのワクチンと治療薬を開発するが、それが免疫不全や不妊を引き起こし、人口削減が達成されて、支配層の企んだムーンショット計画が実現してしまいかねない状況である。

　このように、星新一は近い将来やって来る暗黒の時代に、警鐘を鳴らしていたのである。ショートショートの形では、このような作品を新たに書いても、新鮮味は乏しいだろう。ただ、人間のドラマとして長編で表現するなら、新たな作品を創造する余地は残されている。
　なお、「凍った時間」にはアニメ版があり、内容はドラマ版とほとんど同じであるが、数分で終わるごく短いものであり、俳優の演じる生々しい緊迫感は伝わってこない。

夜と酒と

　内向的な中年男には、何の楽しみもなかった。一人暮らしのアパートに戻ると、寂しくウイスキーを飲んでいた。気がつくと、目の前に見知らぬ女が立っていた。触ろうとすると、つかむことができない。酒を飲むと現れる幻の女は、幽霊なのか、潜在意識から発した女のイメージなのだろう。
　幻覚だと知りながらも、男は現れた女と楽しいひとときを過ごす。それが楽しみでアパートに戻ると酒を飲んでいた。ところが、ある夜、公園のベンチで睡眠薬を飲んで自殺を図った女性を見つけ、救急車を呼んで助ける。
　再び公園を訪れると、命を助けた女性がベンチに座っていた。

住むところもなく、死ぬしかなかったと語る。そこで、男は自分のアパートの隣が空いているので、そこに住むように諭す。
楽しいひとときを過ごしたのだが、男は幻覚で見た女と、目の前の女が同一人物だと思い込む。「私のことを知っているでしょう?」と言うので、女は自分とは異なる女性のイメージを、投影しているだけだと思う。女は男に黙って、隣の部屋から引っ越してしまう。
絶望した男はバーに行って、一人で酒を飲んでいる。ホステスが現れるが、その女性も幻の女のように見えてしまう。要するに、この男は生身の女性とコミュニケーションする能力がないので、欠けている部分を補償するために、幻の女を潜在意識から呼び寄せたのだが、余りにそのイメージにはまり込んで、

実際にいる女性を見ることすらできないのである。

ずれ

会社で歯車のように働かされた青年は、自殺を決意して、有毒な塗料を壁に塗るように、ＡＩに注文する。麻薬密造グループは、警官と闘うためのロボットを、ホステスはワインと下着を、レアメタルで大もうけした男は、娼婦を注文する。

ところが、ＡＩは出来が悪く、同じマンションの同じ階に住む住人の部屋を間違えてしまう。大もうけした男には、ワインと下着が送られてくるが、肝心の女性が現れずにむらむらしたところに、警官が乗り込んでくるので、自分が捕まると思って、戸棚の中に隠れる。これは最もコミカルなずれである。

ホステスの所には、闘うロボットがやってきて、襲いかかっ

てくるのだが、所詮はロボットなので、ホステスに倒されてしまう。彼女にとってはとんだとばっちりであり、火事場の馬鹿力を出したと考えれば、笑うに笑えない。

麻薬密造グループの所には、有毒な塗料が送られてきて、たちまち噴射が始まる。部屋から逃げ出したところで、警官に逮捕されるわけだから、天罰覿面（てんばつてきめん）といったところか。

自殺を決意した青年の前に、美しい娼婦が現れる。「死に神か」と問いかけ、「天使か」と言い換えた後に、彼女と抱き合う。青年は死の誘惑から救われたのだろう。これはずれによってもたらされた恩寵である。

四つの部屋の注文を、ＡＩが間違えたらどうなるかと、機械的にずらしただけのように見えるが、そのずれがどのような効

果をもたらすかまで、作者は計算に入れているのだろう。
　以前アニメ化されたこともあるが、余りに短いので話を味わう前に終わってしまう。原作のショートショートの粗筋をたどった物でしかないからだ。人間が演じた場合のリアルな滑稽さは感じられない。頭で「ずれ」を理解するしかないからだ。

もてなし

　何をしてもうだつが上がらず、恋人もおらず、自殺を試みようとしても、酒を飲むことしかできない若者は、ある日、見知らぬ男からバッジを渡される。バッジをつけられ、人々から「ブルギさん」と呼ばれるようになる。
　その日から人生は一転する。金がなくても見知らぬ人からおごられ、女性からキスを求められ、大きな商談もまとめられ、暴漢に襲われたときも、身を挺(てい)して守ってもらえる。それも「ブルギさん」のためにというのだ。
　ある日、若者は見知らぬ建物に連れていかれる。実は彼に尽くしてくれた人々は、月に奉仕する新宗教の信者だったのだ。

「ブルギさん」というのは生贄（いけにえ）のことであり、死ぬ前にさまざまな「もてなし」を受け、最後に剣で心臓を切り取られて、月に犠牲として捧げられるのである。

　これは、アステカ文明で行われていた、生贄の儀式からヒントを受けたものだろう。神に捧げられることになった子供たちは、美しい衣服を着せられ、国王のように贅沢（ぜいたく）な食事を与えられ、皆に祝福されながら、最後には心臓を取り出される。これによって、五穀豊穣（ごこくほうじょう）が神から保障されるのである。

　これは日本人とも無縁ではない。「人身御供（ひとみごくう）」「人柱」などという言葉が残されているように、かつては生贄の儀式が行われ、それが動植物で代用されるようになってからも、集団のために犠牲になることは美徳とされてきたのだから。

鍵

　ある日、男は異国風の不思議な鍵を拾う。どの鍵穴に合うのか、合いそうな穴に差し込むのだが、その鍵で開く鍵穴は見つからない。よその家に泥棒に入ろうとしているみたいだが、男は純粋な気持ちでやっている。

　シンデレラの靴みたいに、男にとってぴったりの女性を探しているのか。鍵をペニス、鍵穴を膣のシンボルだと考えれば、男は鍵を使って、女性遍歴ならぬ鍵穴遍歴を行っていることになる。いろいろな穴に差し込んだ末に鍵穴が開けば、何かしらの成果を残せるということか。

　錠前屋を訪れた男は、鍵が異国の物であると知り、飛行機に

乗って鍵穴遍歴を続ける。しかし、ぴったりの鍵穴は見つからず、ついに分からずじまいになってしまう。
年老いた男は、その鍵に合った鍵穴を作ってもらう。これによって、男の鍵穴遍歴は終わりを告げる。鍵穴の向こうから、幸運の女神が現れ、鍵を落としたのは自分だと答える。男にとって、幸福を求めて旅したことが人生であり、鍵穴を作ったことは、自身の生涯を閉じることを意味する。冒頭で男は出現した何者からか逃げ惑っているが、現れた女神は死神でもあるからではないか。
なお、以前のビデオ化では、年老いた男が幸運の女神に何も求めず、人生で思い出を得られた満足を伝えるところで終わっている。

買収に応じます

四十代の独身男は、学生時代は野球部でずっと補欠、入社二十年目にしてようやく係長補佐となった。うだつが上がらない男なのだが、自分なりに生活を楽しんでいる。「旅行に行ったつもり」でお金を貯めたりしている。いわゆる「つもり貯金」である。一人暮らしなのに貯金ばかりして何が楽しいかと、言いたいところだが、空想の中で旅行に行って、手元にお金が貯まっていくのを楽しんでいるというわけだ。
ある夜、部屋に死神が訪れる。男は死を免れるために、死神を買収することを思いつく。やむなく、命とおなじくらい大切な「つもり貯金」を死神に渡す。『今昔物語』にもあの世に連

行しようとする鬼を買収して、他の人を身代わりにする男が登場する。結局、閻魔大王にばれて鬼に連行されていくのだが、身代わりにされた方は、この世に戻されたものの、自分の遺体は火葬にされていたので、やむなく最初の男の遺体に入って蘇生するといった手の込んだ話となっている。

星新一の話の方は、至ってシンプルである。死神は買収されて姿を消す。男は以前と同じ暮らしに戻り「つもり貯金」を再開する。一年後、再び死神が現れ、「つもり貯金」を奪って姿を消す。さらに一年後、またもや死神が現れる。死神の話によると、奪った金の一部は地球温暖化のために寄付しているらしい。人間がいなくなってしまっては、死神は失業してしまうからということだ。

こうして、死神を買収することで、一年間の猶予をもらい続けるのだろう。何だかいいカモにされているようだが、考え方によっては、お金で寿命が長くなっているわけだし、身代わりに他の人が死ぬわけでもないので、これは独身男が思っているほどは悪くないのかもしれない。

このドラマに現れる死神は、死神らしからぬ坊やのような顔をしているが、以前、アニメ化されたときは、黒い衣をまとい、巨大な鎌を持った骸骨で、卒倒するほど恐ろしい姿をしていた。

処刑

近未来の社会は犯罪が多発し、裁判はＡＩにまかされている。三審制などなくなり、逮捕され、判決が出ると、すぐさま刑の執行がなされる。これは死刑判決直後に銃殺される軍事裁判と同じである。

　その社会での処刑法は、一種の島流しである。資源を採掘し尽くした赤い惑星に送られる。ロボットの姥捨て山を描いた「薄暗い星で」に似ており、死の恐怖にさらされるという点で共通している。

　正当防衛が認められず、「処刑」が決まった青年は、赤い砂漠と廃墟(はいきょ)しかない星に放置される。ボーリングのボールのよう

な物を一つ持たされて。ボタンを押すと一杯の水が出てくる。何回目かにボールは爆発し、「処刑」が完了すると告げられている。

　青年はその星で、白骨死体を発見する。同じボールを傍らに置いたまま死んでいる。それを見て、自身の最期が見えてくる。このボールはボタンを押すたびに、死の恐怖とひきかえに、一杯の水が与えられる。しかし、ついに爆発することなく、衰弱して死んでいくのだと。

　それを確認するために、青年は廃墟の浴槽に、ボールの水をためていく。予想通り、ボールの大きさをはるかに超える水が、浴槽にたまっていく。死の恐怖にさらされながら、死の瞬間まで生き続ける点では、地球での生活と同じだということを悟る。

話をたどって改めて感じたのは、星新一のショートショートや、それを元にしたドラマは、ほとんどが寓話であるという点である。人物の性格を掘り下げるところまで行っていないことが多い。

宣伝の時代

条件反射というのは、餌を食べるときに犬にベルを聞かせると、ベルを聞くだけで犬がよだれを垂らすというものである。人間に条件反射をさせて、そのときに宣伝の文句を言わせたらというアイデアを、アニメ化した作品である。

人々は条件反射を企業に貸して、お金をもらっている。電車で肩がぶつかったり、くしゃみをしたり、あくびをしたり、果てはキスをするたびに、商品の名前を言っている。端(はた)から見ると、人間ではなく、外部から操作されたロボットにしか見えない。自分がロボット化されていても、本人は気づいていないらしい。

ただ、一日中そんな宣伝を聞かされていると、聞いている方の記憶には一向に残らない。人間の適応能力の方が大きいと、語り手はまとめているが、果たしてそれだけだろうか。ロボット化された人間には、何かを志向する意識がなくなるから、生存のために必要なこと以外は、無関心になるからではないか。

ゆきとどいた生活

宇宙旅行専門の保険会社に勤める青年は、八十階建てのマンションの七十二階に住んでいる。すべてが自動化されており、起床から着替え、朝食、歯磨き、出勤まで、巨大な手のロボットが行ってくれる。

ただ、いくらアニメだとはいえ、青年が全く身動きしていないのに違和感を持った。朝食が差し出されても、手を出す気配もなく、時間がたつと、本人が何もしなくても、カプセルに入れられ、チューブの中を移動して、職場に送り届けられてしまう。

会社に着いた青年は身動きしない。同僚が触ると、体はすで

に冷たくなっている。医師の診断では死因は心臓発作で、死後十時間たっているとのこと。いくら機械化されて、ゆきとどいた生活を送っていても、ロボットは決まったことしかしないから、相手が死んでいても、生きてるときと同じ扱いで、出勤させられてしまうことを皮肉っているのだろう。

ただ、ここに登場するロボットは二十世紀の技術に基づいているようだ。現在なら人間の心拍数や体温も計測しているだろうから、肉体に異変が生じた時点で、病院に連絡が行って、医師が駆けつけているはずである。

紙幣

女性は借金を返そうとしたが、子供の急病の治療費に充てる必要があり、返済を待ってくれと言う。男性は返済してもらわなければ、会社が不渡り手形を出して、一家で夜逃げしなければならなくなると言う。

テーブルに札束を置いて話し合っていると、窓の外に二人の宇宙人が現れる。札束を見ても、それが何だか分からない。単なる紙くずみたいな物に、価値があるとも思えない。試しに札束を持っていき、宇宙船の複製機で同じ札束を作って戻ってくる。

女性と男性は、テーブルの上の札束が二つになっているのに

驚く。これは神さまからのお恵みだと言って有り難がっている。一方は複製品だから、偽札だということになる。精巧に作られているなら、偽札とは気づかれずに使えるかもしれない。外見上、全く同一だったとしたら、本物と複製した紙幣は、区別がつかないかもしれない。

　喜んでいる二人を見て、宇宙人は紙幣を大量に複製して、空中からばらまく。人間たちは大喜びするだろうと考えて。これだけばらまかれれば、偽札だということは露見するだろう。

　作者は紙幣のような紙切れに、価値を置いて人生を振り回されることの愚かしさを、風刺しているのかもしれない。また、金に裏づけられていない不換紙幣は、政府がいくらでも自由に印刷できるはずで、宇宙人が紙幣を複製しているのと、大して

変わらないと言いたいのだろう。

殺し屋ですのよ

中年の男が散歩していると、殺し屋だと称する若い女と出会う。殺したい相手を、不審を抱かれずに殺すことができると請(う)け合う。呪(のろ)い殺すというのである。男が殺してもらいたいと思っている相手まで、女はなぜか知っていた。

成功報酬で手付金も要らないというので、男はライバル会社の社長の殺害を依頼する。しばらくして、本当に心臓発作で死亡したので、約束通り報酬を支払ってしまう。

実は、女は看護師だった。持病持ちで死期が迫った人物を探し出し、その存在を邪魔だと感じている相手に、殺し屋だと称して殺害の注文を持ちかけ、実際は持病で死んだにもかかわら

ず、呪い殺したとして報酬を受け取っているというわけだ。

呪い殺すと言っても、何もせずに報酬を受け取る看護師は、職業上で知った情報を悪用して、金を騙し取る詐欺師に過ぎない。呪いなんてその程度のものだよ、と作者はあざ笑っているように見える。本当の呪いとは、そんなものではないと思うのだが。

調査

正体不明の物体が現れる。どうやら地球の物ではないらしい。中から電波が出てきている。うまそうな匂いまでしてくる。犬が食べ出したので、人間も食べてみる。未知の物を調査しようというのは、人間の本能だと考えられる。

調査するためには、物体の中を見なければならない。中を引っ掻(か)いても、よく分からないので、熱を加えたり、冷やしたりする。「押して駄目なら引いてみろ」の調子で、最後は放射線まで当ててみる。

実は、その物体は宇宙人が地球の生命体を調査するもので、その文明が脅威を与えるものかどうか知るために、地上に降り

てきたのだった。放射線を当てたことで、人類は宇宙人にとって脅威だという結論が出て、中から毒ガスが噴出し、滅亡に追いやることになる。

天文学者の一部は、宇宙人とのコンタクトを試みて、わざわざ地球のデータを太陽系の外にまで飛ばしているが、もし宇宙人が悪意のある存在で、乗っ取る星を探していたとしたら、とんでもない災いを地球にもたらすに違いない。

おーいでてこーい

この作品は星新一のショートショートで、初めて知ったものである。小学六年生のとき、担任の代わりに来た先生が読んでくださったのだが、その時の驚きは今でも記憶に残っている。

ひどい嵐で神社が倒れてしまった。その跡に大きな穴が開いていた。一人が下を覗いて「おーいでてこーい」と叫び、大きな石を投げ入れる。穴はニュースとなり、学者が調査に入ると、埋めてしまえばいいということになった。

ある業者がその穴を埋める権利を得る。深さ五千メートルはあるというので、原子炉のカスやら産業廃棄物やら、ありとあらゆるゴミを投げ入れる。それでも穴は埋まらない。

ある日、空から「おーいでてこーい」という声が聞こえて、大きな石が落ちてくる。物語はそれで終わりなのだが、その後、原子炉のカスやら産業廃棄物やら、ありとあらゆるゴミが降ってくることが暗示されている。自業自得であり、すべてはつながっているということだ。

宇宙の男たち

宇宙船は隕石にぶつかって航行不能となる。中には息子のいない中年の男と、孤児の若者が乗っていた。助かる見込みはほとんどないが、万に一つの可能性に懸けて冬眠剤を飲むことになる。

　これを飲むことで、本来の寿命が尽きた後でも、生還できるかもしれないのだ。ただ、その場合でも、数百年が経過しかねず、身の回りには知っている者はいないだろう。

　若者は遺書を書いたが、自身の名前は記さない。孤児なので親はいないのだが、今まで宇宙で多くの若者が死んだので、この遺書がそうした若者の親たちの心を慰められればいいと思っ

たのだ。その話に感動した中年の男は、手元にあった壱万円札の束を、その遺書に添える。小型のロケットで、遺書とお金は地球に向かって発射される。

　なすべきことを済ますと、若者と中年の男は、息子と父のように語らう。そして、二度と目覚めないかもしれないが、生還するわずかの可能性に懸けて冬眠剤を飲み、恐らく二度と目覚めない眠りにつく。

夢と対策

夢は未来を暗示する場合と、不安が反映している場合がある。夢の内容が現実で起こったとき、はじめて予知夢と呼ばれるわけで、夢を見る原因の多くは、心身の不調が関係している。

とはいえ、悲劇的な結末が待っている場合、夢の中だけでなく、日常的に不安がついて回る。向田邦子はエッセイの中で、飛行機に対する異常な恐怖を描いている。エンジンの音が少しでもおかしいと、この飛行機は墜ちるのではないかと思う。実際に、向田の乗った飛行機は、台湾上空で爆発して墜落した。

アニメ「夢と対策」の主人公は、次のような悪夢を見続ける。飛行機が火を噴くと、腕時計は十三日の金曜日午後四時を指し

ている。

ちょうどその日は十三日の金曜日だったが、上司に出張への同伴を命じられる。悪夢とはこのことなのかと思い、顔が青ざめてしまう。体調が悪いなら他の奴に頼むからいいと言われ、悪夢が現実となるのを回避できたと思う。

自宅に戻ってほっとしていると、飛行機が爆音を轟かせて、主人公の部屋に向かって突っ込んでくる。悪夢は現実化したのだろうか。それとも、酒を飲んでいるので、また同じ夢を見ているのだろうか。

鏡

子供の頃、母の三面鏡のうち、左右の鏡を平行に立てて、中をのぞいて遊んだことがある。自分の顔が無限に複製されて、どこまでも続いていく。奇妙な感覚にとらわれたものだが、実は、そこに悪魔や心霊の通り道が出来てしまうので、縁起が悪いこととされている。

このアニメに出てくる夫は、合わせ鏡で現れた悪魔を捕まえてしまう。大きさはネズミぐらいで、抵抗する力もないように見える。そこで、夫と妻は腹癒せに、悪魔に火のついた煙草を当てたり、金槌（かなづち）や包丁で傷つけたり、壁に叩きつけたり、ありとあらゆる拷問を加える。鏡の魔力のせいで、夫婦の方が悪魔

になってしまったようだ。

ところが、妻が手鏡を出したとき、たまたま合わせ鏡が出来てしまったのだろう。逃げ道が現れて、悪魔は囚（とら）われた部屋から逃げ出す。それを知った夫は激怒し、妻に暴力をふるい、妻はやりかえし、家の中は修羅場と化す。悪魔が逃走したことで、結果的に不幸がもたらされたというわけだ。

椅子

私と彼は学生時代からの旧友で、ともに母を亡くしていたことで、親しい間柄になっていた。彼は社長をやっていた。半年前に金を貸し、久し振りに再会してみると、社長を辞めてしまい、廃屋のような家で自堕落な暮らしをしていた。ドイツで買い求めたという豪華な椅子に腰掛けて。

働いて金を返せと彼に言うと、金はないし、働く気もないという答え。私は激高して、彼を人間の屑だとののしり、彼の座っていた椅子を取り上げてしまう。この椅子だけは持っていかないでくれという哀願を無視して。

私は取り上げた椅子に座ってみる。すると、幼時に母の膝に

いた時のような安楽を味わう。それだけで満足してしまい、彼と同じように働く意欲を失ってしまう。何物にも代えがたい幸福で、あとは何も要らない。そんな魔力を持つ椅子だったのだ。

アフターサービス

精力的な男性の悩みと言えば、まず挙げられるのが脱毛である。男性ホルモンが過剰だと、若いうちからはげ始める。カツラは高価だし、管理するのも手間がかかる。とりあえず、養毛剤を使ってみても、大して効果はない。ミノキシジルという発毛剤だけが、現状で効果が認められる医薬品だという。

このアニメでは、はげ頭の画家の所に、発毛剤のセールスマンがやってくる。画期的な効果を謳った製品を持って。毛髪の種を植えると、毛が生えてくるというのだ。ただし、植物性なので黒く染める必要がある。生えるスピードが速いので、自動理髪機も必要となる。

若者のようにふさふさにはなったが、緑の髪を黒く染め、自動理髪機を使うのに振り回され、絵を描く時間がなくなる。うんざりした画家は、セールスマンから脱毛剤を買ってはげ頭になる。元の姿でせいせいしているが、ふりだしに戻っただけである。その間に膨大な料金をセールスマンに払わされて。

語り手はバス停で、小さな会社に勤めるサラリーマンと知り合う。会社でも家でもストレスが多いというのに、なぜか幸せそうな顔をしている。彼によれば、いつも同じ夢を見ているからだということだ。

　誰も入ってこられない自分だけの部屋で、好きな家具を置いて、ゆったりとした椅子に腰掛ける。ベッドに、テレビ、フィットネスバイク、彫刻。ほしいと思った物を、夢の部屋に配置していく。彼は現実よりも、夢の世界に生きるようになる。

　しばらくして、彼の様子に異変が生じる。夢の部屋のドアや窓が開かないというのだ。症状が悪化した彼は、恐ろしくて夜

眠れないと話す。眠りに抵抗していて、バス停でウトウトした途端、悪夢に苛まれて悲鳴を上げる。夢の部屋は精神病棟と化してしまったのだ。

　コンピューターゲームにはまって、現実の生活を忘れた若者の、頽廃（たいはい）した生活を揶揄（やゆ）しているようにも見える。スマホ中毒の現代人には、さらに危険な世界が待っている。ムーンショット計画というもので、メタバースという仮想空間でアバターが活動し、実際の仕事はロボットが行うため、大幅な人口削減が画策されているのである。

よごれている本

古本屋で男は魔法の本を見つける。ヘブライ語で書かれているらしく、店主も読めないという。興味本位で男は本を買う。何気なく呪文の一つを唱えると、ページに描かれた「生命の木」が浮き上がる。

魔法というのは、カバラのことである。ユダヤの神秘主義で、「生命の木」というのは曼荼羅（まんだら）のようなものである。宇宙生成のしくみや人体に流れるエネルギーを図示している。魔法には白魔術と黒魔術があり、白魔術が人々を助けるために行うのに対し、黒魔術は利己的な目的で行う。儀式の形は同じであっても、利他的な意識のない人間が行うと、邪悪な精霊、悪魔が近

づいてくる。

部屋に戻って面白半分で呪文を唱えていると、目の前に本物の悪魔が現れる。悪魔の周りには円がある。これは結界（けっかい）を表す魔法円であって、その内側は築いた側の勢力圏である。通常は魔術を行う側が魔法円の中に入っている。主人公の男は魔法円を築くことなく、悪魔を呼び出してしまう。悪魔は生贄（いけにえ）を探していたと言って、自身の魔法円の中に男を連れ込み、この世から連れ去ってしまう。

男が行方不明になったので、家主は古本屋に魔法の本を売りに来る。その本は興味本位で魔術を行う人間を待ち構えている。魔法自体に興味がなくても、有名人になりたいと思っていると、向こうから近づいてくる。しかし、魂を売り渡すようなことは、

決してしてはならない。芸能人やスポーツ選手の多くは、地位や名声のために悪魔と契約を結んでいるらしい。

人類を操る秘密結社「カバール」というのは、ユダヤ神秘主義の「カバラ」に由来するが、悪魔崇拝のために生贄を犠牲にする黒魔術を行っているという。これらは陰謀論で一括りにされているが、その存在は一般人にも知られつつある。

神

経営者が博士に、神を作ってくれと依頼した。そこで博士は神についての情報を集め、装置に保存していった。情報が統合されるにつれて、装置は神に近づき、光輝くようになってきた。

ついに完成したときに、装置は忽然として姿を消した。神は超感覚的なものなので、目に見えなくなったことが完成の証だと、博士は考えたのである。しかし、依頼した経営者は出来上がった神でビジネスを行おうとしていたので、神を冒瀆する言葉を吐いた。

その瞬間、雷に打たれたように、経営者は命を絶たれた。それは博士が作り出した装置が、神だったからだろうか。そもそ

も、神を作ろうという考え自体が冒瀆であり、博士の頭にも角が生えていた。その後、世界中で大地震、大噴火、巨大なハリケーンによる洪水が発生していった。

悪夢

男はピストルで頭を貫かれる夢を続けざまに見た。こんな夢を見るようじゃ、俺もおしまいかと思う。窓を開けた瞬間、部屋の中に宝石泥棒が入ってくる。男は全身縛られ、猿ぐつわをはめられて納戸（なんど）に押し込まれる。

宝石泥棒は男の服に着替え、ビールを飲んでうとうとしている。翌朝、この部屋からずらかればいいと思って。

そのとき、部屋に殺し屋が侵入してくる。実は、この部屋で暮らす男は、ボスの金を持ち逃げしていたので、殺し屋は宝石泥棒をこの部屋の住人と思い込んで射殺する。

悪夢はたしかに正夢となったわけだが、たまたま宝石泥棒が

侵入してきたおかげて、身代わりになってくれた上に、泥棒の盗んだ宝石まで手に入ったというわけだ。

ねらわれた星

なめくじのような姿の宇宙人が、地球を侵略しようとする。動き回っている人間を見て、「気持ち悪い」と言って大笑いする。自分たちのことは棚に上げて。地球に下りていき、一匹人間を捕まえて皮をはぐことにした。皮が何で溶けるかを調べ、地球に大量に散布することにした。

薬剤がまかれると、地上ではパニックが起きていた。世界中の男女の服が溶けて、裸になってしまったからだ。宇宙人たちはその様子を眺めているうちに、喜んでいる人間を発見した。異性の裸が見られたからだろうか。

皮が溶ける薬をまいて喜ぶ奴がいる星を、宇宙人は気味悪が

って去ることにした。危機一髪で地球は救われたという笑い話である。服が溶けるぐらいなら、髪の毛や肌もダメージを受けないはずがないのだが。
　とはいえ、空中から有毒な薬剤がまかれているのは、現実なのだから笑ってばかりもいられない。ケムトレイルは気象操作のためとか、医療利権のためとか言われている。重金属で雨を降らしたり、アレルギー患者を増やしたり、細菌をまいて人体実験をしたりしている。それをしているが宇宙人ではなく、地球人なのだから、救いようがない事態と言わざるを得ない。

万能スパイ用品

　敵国のミサイルの秘密を探るために、スパイが呼び出される。敵国に侵入するのは一人だが、万能スパイ用品があるので、大丈夫だろうというのである。
　外見はアナログカメラだが、ラジオ、暗号無線、バリカン、養毛剤、ワイヤー、カッター、催涙ガスまで中から出てくる。これで本国と連絡を取りながら、変装をしてミサイル基地に侵入し、警備員と戦えというのである。
　ただ、肝心のミサイルを撮影する機能が、カメラ型の万能スパイ用品には備わっていなかった。そこで、携帯電話で写真を撮ってこいという落ちである。

実際に軍事施設に侵入して、外見を写真に撮れたとしても、ミサイルの機能が分からなければ意味がない。外見がいかに頼りにならないかは、カメラを「万能スパイ用品」に仕立てたという前提からも明らかである。単なる笑い話に過ぎないと言うしかない。

猫と鼠

若い男が中年の男に弱みを握られている。若い男が女性を殺したところを、中年の男に見られたからだった。中年の男は口止め料として、何度も稼いだ金を搾（しぼ）り取っている。

若い男は我慢ができなくなる。中年の男の殺害を試みるが、中年の男は自分が殺されれば、若い男の以前の犯行が明かされた上に、自分を殺害したことで死刑は確実だと答える。

それに対して、若い男は中年の男のそっくりさんを見つけていた。中年の男を殺害しても、事件扱いされないだろうと考え、ナイフで刺し殺してしまう。

身代わりの男は何も知らなかったのだろうか。そこに、あな

たの殺人を目撃したから、口止め料を出せという電話がかかってくる。電話をかけてきた男は、二人を殺した若い男なのだろう。身代わりとなった男は、わけも分からずに、若い男に金を返していくという筋書きなのだろう。

窮鼠(きゅうそ)猫を噛(か)むということわざを、ドラマ化したものである。ただ、身代わりの男が、なぜそんな役を引き受けたのかがよく分からない。実際に殺人を犯していたから、そんな役をやらされたのだろうか。ドラマを見た限りでは、その辺が合点(がてん)がいかない。

リオン

動物学者のケイ博士は、リスとライオンを掛け合わせた動物を作り出した。リスのように可愛く大人しく、ライオンのように強く勇敢(ゆうかん)な動物だった。

それに感心した植物学者のエス博士は、ブドウとメロンを掛け合わせた植物を作ることにした。メロンがブドウのようにたくさんなることを期待して。ところが、ブドウがメロンのように一つしかならなかった。

これは昔話によくあるパターンで、成功した人の物真似をしてもうまくいかないというものだ。笑い話の一つなのだろうが、現実の社会には、マッドサイエンティストがいて、人工的に危

険なウイルスを生み出したり、人間と動物の遺伝子を組み合わせて、キメラ（合成獣）を作り出しているという。笑い話では済まされないのである。

黄金の惑星

男女が乗った宇宙船が救難を求める無線を傍受する。「黄金の惑星を発見せり」という声で途絶えたが、通報せずに惑星へ行き、転がってる黄金を我が物にしようとする。

惑星に接近して地表を観察すると、原始人が集落を作っている。転がっている岩はどれも黄金のようだった。宇宙船が着陸すると、原始人が寄ってきたので、近づくなと銃を乱射し、船内に詰める限りの黄金を詰め込む。

いざ発射すると、黄金が重すぎてうまく飛べず、「黄金の惑星を発見せり」という無線を発信して墜落してしまう。九死に一生を得て、みすぼらしい姿で歩いていると、原始人が近づい

てくる。「実は、私たちも元地球人だったのです」と告げる。原始人に見えた人たちも、黄金を求めてやって来て、欲に目がくらんで宇宙船が墜落し、原始人のような生活を送ってきたというわけである。

この星には、今後も地球人がやって来て、同じ愚行を繰り返すことが暗示されている。いくら黄金がたくさんあっても、ありふれた物質であるなら、希少価値などはない。黄金が珍しい地球だからこそ、富を築くことができるのであって、黄金の星では黄金など一文の価値もなく、貧しい生活を送らざるを得ないのである。

災難

語り手は選りすぐりの鼠たちを飼っていた。ある日、逃げ出してしまったので、探しに出たところ、大きな地震が起こり、怪我一つせずに済んだ。また、鼠たちを連れて船に乗ろうとしたとき、鳴きだしたので乗るのをやめると、船は沈没してしまった。

いつも助けられている主人公は、またもや鼠たちの異常を察知した。そこで、あわてて他の家に引っ越した。そのまま暮らしていたら、どんな災難が降りかかったのだろう。語り手は元の家の大家に電話をかけてみたが、何も変化は起きていないようだった。ただ、隣には猫が大好きで、たくさん飼ってる人が

住んでいたことが分かった。
いつも気遣ってくれていると、語り手は思っていたのだろうが、鼠たちは自身の身に降りかかる災難を恐れていただけなので、選りすぐりの優秀な鼠というのは、飼い主の買いかぶりに過ぎなかったのだ。

博士とロボット

エフ博士はロボットの助手を従え、文明が遅れている星へ行き、さまざまな指導を行っていた。井戸を掘り、機械で耕作し、住宅を建てていくなど。
十分に文明が発達したところで、博士は次の星に移動することにした。その星の住人は、感謝の気持ちを表すために、銅像を鋳造（ちゅうぞう）したと告げる。お披露目（ひろめ）となり、博士は自負心に酔いしれていた。ところが、現れたのはロボットの像だった。
住人たちにとって、生活を楽にしてくれたのはロボットであり、指令を出していた博士のことなど、眼中にはなかったのである。感謝されることを期待して行うボランティアなど、自己

満足に過ぎないというわけだ。

悪をのろおう

女性がハンドバッグを奪われる。犯人は若い男らしいということしか分からない。ただ、女性の手には犯人の髪の毛が残されていた。

警官に何とか捕まえてほしいと訴えていると、そこに怪しげな男が現れる。藁人形と五寸釘を持っていて、髪の毛さえあれば、相手を呪うことも可能だというのだ。そんなことあるかという警官の髪の毛を、藁人形に巻き付けて五寸釘で刺すと、警官は痛みで七転八倒する。

効力が分かったところで、犯人の男の髪の毛を藁人形に巻き付け、いざ呪う段となった。ところが、犯人は鬘をかぶった

中年の禿男だった。女性がつかんだ髪の毛は、鬘の物だったのである。

もし人工毛だったら、誰も苦しまないだろうが、人毛だったら鬘のために髪の毛を売った人が、七転八倒することになる。

ただ、藁人形と五寸釘を、笑い話にするのはいただけない。遊び半分で行ったら、とんでもない結果をもたらしかねない。「人を呪わば穴二つ」という教訓を、現代人は知らないからである。

プレゼント

地球では核戦争が勃発していた。大気圏外から見ていた宇宙人は、「心を込めたプレゼントを受け取るがいい」と言って、謎の立方体を投下する。

中からリスのような巨大生物が出てきて、地上を闊歩し始める。それに対して、当初は覇権争いを続けていた人類も、力を結集すべきだという声が上がり、一致団結して怪物退治に当たる。

宇宙人は核戦争が収まったのを見て、プレゼントが功を奏したと喜ぶ。平和の使者として愛玩動物を送ったつもりらしい。

ただ、宇宙人にとって可愛くても、人類にとっては脅威だった

ので、退治されてしまったのである。
宇宙人と人類とでは、考え方も感性も異なるから、誤解は避けられない。とはいえ、結果的には核戦争は収まったわけで、「終わり良ければすべてよし」というのが、このアニメの教訓なのだろう。

約束

宇宙人が植物を採集する目的でやって来た。子供たちが協力してくれたので、お礼に何かしてあげようと言った。大人たちは賄賂(わいろ)など、悪いことばかりしているから、何とかしてほしいというのが、子供たちの願いだった。
しばらくして、宇宙人は子供たちを探そうとしたが、なかなか見つからない。地上では数十年の歳月が流れ、約束した子供たちは、すっかり大人になっていたからだ。宇宙人との約束など忘れて、煩(わずら)わしいとしか感じなかった。純真な子供の心も、成長すると失われてしまうのを皮肉っているのだ。
このアニメに登場する宇宙人は、人類にとっては善意の存在

だったが、宇宙人には善意を持つ者と悪意を持つ者がいるらしい。たとえ、悪意はなくても、生物調査を目的として、人間を拉致（らち）するかもしれない。人間が花を摘むのと同じくらいの感覚で。大人は悪いことばかりしているという言葉を真に受けて、大人たちを退治してしまいかねない。コミュニケーションが容易ではないことを、留意しておく必要がある。

花とひみつ

花の大好きな花子は、モグラを飼い慣らして、草や木の世話をさせれば、世界中が花でいっぱいになると思った。アイデアを描いていると、絵が風に飛ばされてしまった。

　絵はある島の研究所に届いた。研究者たちは、これを本国からの指示と誤解して、花を咲かせるモグラをロボットで実現した。本国からやってきた大臣は、こんな物を作る奴らはバカだと言い、研究所を取り壊してしまった。

　島は無人となったが、ロボットのモグラは陸地を求めて移動し、花子の住む町にも花を咲かせていった。これは花子の夢が実現した物語であり、何もない所に花が咲く理由を、架空の話

で説明する現代の伝説でもある。

愛の鍵

ロックされた物を開けるのは、かつては鍵や暗証番号ぐらいだったが、最近は顔や指紋の認証が使われるようになった。ただ、これも安全性は十分ではない。顔写真を元にしたゴムマスクを作れば、本人になりすますことは可能だし、指紋だったら、寝ている間にスマホの画面に当てられれば、解除されてしまう恐れがある。

　このドラマでは、本人しか知らない合い言葉を言うことで、鍵を開ける方法が使われている。ただ、声の質は考慮されないので、たまたま他人がその言葉を言ってしまうと、ロックが解除されてしまう。誰かに聞かれてしまいかねないし、安全性と

しては不十分である。

ある女性が恋人の男性と口論になる。そのまま喧嘩（けんか）別れになってしまい、謝れなかったことを後悔しつつ部屋に戻る。「今日は本当に楽しかったわ」が言葉の鍵だった。部屋に入った彼女は、「悪かった。ごめんなさい」に鍵を変更した。

しばらくして、恋人が部屋のドアの前に来る。ただ、ためらってしまい、呼び鈴を鳴らすことができない。「悪かった。ごめんなさい」口を衝（つ）いて出た言葉で、部屋のドアが開いた。飛び出してきた彼女は、男性と抱き合う。ちょっと出来過ぎたラブロマンスだ。

海

漁師が蛸（たこ）を捕まえた。すぐに食べずに、台所の桶（おけ）に入れておくと、野菜が減っていた。蛸が食べたのだろう。蛸はご飯や大根、豆、卵なども食べた。酒を飲ますと、変な踊りをして眠ってしまった。

蛸を連れて漁師は海に出た。蛸に教えられた所では、魚がたくさん捕れた。皮膚が乾いたので、ガマの油を塗ったところ、毛が生えてきて可愛くなり、子供の遊び相手として評判となった。

漁師が百歳近くで亡くなったとき、蛸も海へ帰っていった。ほのぼのとした昔話で、星新一の他の作品に見られるブラック

ユーモアとは、およそ対照的な世界である。

ネコ

おじさんがネコと暮らしていた。ある日、宇宙船が玄関先に現れる。おじさんは気絶してしまう。その間に、宇宙人はどんな生物とも話ができる機械を使って、ネコに事情を聞くことにした。

ネコはおじさんのことを奴隷と呼んだ。真面目に働き、食事の世話をしてくれる。また、毛づくろいやネズミを追いかけるなど、日常の暮らしについても話した。

宇宙人は地球をネコが支配する星だと考えた。こんな平和な生物が支配する星なら、危険をもたらすことはないと判断し、宇宙船に乗って去っていった。

これはネコが自分を主人と考えているのに、餌をもらうために媚（こび）を売ることを、皮肉っているのだろう。主人だと思っているのは、ネコの頭の中だけである。現実には人間は我が物顔にふるまい、利益のためなら相手の命など何とも思わない。ネコになど質問したことが大間違いだったのである。

愛用の時計

お気に入りの腕時計に、主人公は愛情を感じている。男というものは、自家用車やオートバイ、コンピューターなどを、偏愛したりする。まるで自分の恋人のように。

ところが、愛情をかけているのに、時計は遅れてしまい、乗る予定だったバスに乗れずに、旅行に行かれなくなってしまう。男は購入した店に時計を持っていく。ところが、この時は正常に動いている。

実は、旅行で乗るはずだったバスが、転落事故を引き起こしていたのだ。そのバスに乗らずに済むように、時計が意図的に針の進行を遅らせたというのか。時計の方でも男を愛していた

ので、助けたかったというのが、表面的な解釈である。
実際は男の無意識が事故を予見していて、バスに乗らずに済むように、時計の進行を遅らせたというのだろう。これは心理学者のユングが提唱した共時性という仮説である。偶然の一致には人間の無意識が関わっており、本人が亡くなった瞬間に、愛用した時計も止まってしまうような現象が、実際に存在するのだ。

さまよう犬

女性はいつも犬の夢を見ていた。犬は野原を寂しげに歩いており、何かを探しているようだった。いつしかその犬が好きになってしまい、焦りに似た感情は、目が覚めた後も残るようになった。その後、女性はある男性と結婚した。それとともに、犬の夢を見ることはなくなった。
あるとき、夫は女性に結婚前に見ていた夢について話した。自分が一匹の犬になって何かを探してさまよっていたというのだ。夫の方も結婚を境に夢を見なくなっていた。
ごく親しい間柄では、夢を共有するということがあるらしい。心理学者からすれば、意識は波頭（なみがしら）のようなもので、無意識は

海であって、個人の意識も深層では他人とつながっているという。

月の光

人間には言葉など要らないと信じている医師がいた。拾った女の赤ちゃんを、言葉を一切使わずに、愛情を注いで部屋の中で育てていた。少女は幸せそうに見えたが、社会性を奪われた愛玩（あいがん）動物のようだった。

あるとき、医師が事故に遭（あ）った。代わりに使用人が食事を持っていき、「今日は帰ってこない」と言ったが、少女には伝わらなかった。医師がそのまま亡くなると、少女も絶食したまま息絶え、魂は天に昇っていった。

医師は少女を愛したつもりだったが、自分以外の者とのコミュニケーションの機会を与えなかったため、自立して生きる力

が得られなかった。言葉を知らない点では、狼に育てられた少年と同じで、姿形（すがたかたち）は人間でも人間らしさは身につかなかったのだ。

はじまり

男が夜道を歩いていると、宇宙人がＵＦＯを取り出した。巨大化したＵＦＯは宇宙人を吸い上げて、どこかへ行ってしまった。びっくりした男は、通りかかりの女性に話す。すると、女性もＵＦＯを取り出して、それに乗って去ってしまった。

　男は交番に駆け込んだが、交番でもＵＦＯが取り出され、警官も飛んで行ってしまった。これは小泉八雲の『怪談』の「むじな」がねただと思った。「のっぺらぼうが出た」と、夜鳴き蕎麦（そば）に駆け込むと、蕎麦屋ものっぺらぼうだったという話だ。

　このアニメでは、男は精神病院に診察に行く。医師と話すうちに、男は自分のポケットからＵＦＯを取り出し、同じように

ＵＦＯで帰還してしまった。
　これは怪談のスタイルを取っているが、自分のルーツを忘れていた者が、初めはＵＦＯや宇宙人に驚愕（きょうがく）しているが、自身も宇宙人だったことに気づく癒しの物語なのだ。
　作者の星新一は二十世紀末に亡くなっているが、二十一世紀になり、いよいよ宇宙人の存在が情報開示されるらしい。その場合、多くの人間の反応は、登場人物の男と大して変わらないのではないか。

運命

　他人の未来が分かる男がいた。「運命予測診断所」という看板を掲げ、他人の未来を読んで、生活を立てていた。高校受験、結婚、悪夢など、相談される内容はさまざまで、よく当たると評判を呼び、多数の客が押し寄せていた。
　男は他人の未来を読むのに疲れ果てた。「俺の未来を教えてくれ」と絶叫すると、地震が起こって驚く。このドラマを見て、小泉八雲の『日本の面影』所収「占（うらない）の話」を思い出した。いくら他人の運命を読むことができても、自分の未来は分からないというもので、「占師（うらないし）身の上知らず」という諺（ことわざ）で、その話は締めくくられている。

ただ、易学家の高島嘉右衛門は、占いを商売にすることを戒めていた。自身の死期も悟っていたという。未来が見える人間は、それに見合う精神力も必要である。生半可なことを口走って、金もうけしている大道易者には、自身の未来など怖くて見られないのだろう。

こん

妻が「こん」としか言わなくなった。狐憑きになってしまったとして、夫は妻に付き添って病院で診察してもらった。身体からデータを取ったところ、精神的ショックでひきつけを起こし、思考停止に陥っていることが分かった。

注射を打つと、妻の意識が戻り、何がショックだったか明らかになった。「承知しないわよ、今度浮気したら」と妻は口走る。これで一件落着というわけだが、星新一らしいひねりがない。

注射を打ったら、取り憑いた狐が話し出したとか、奇想天外な展開をするのが、星新一の考えそうな世界なのだが。「こん」

と鳴いたわけを放置したまま、物語を終わらせるのは、上首尾(じょうしゅび)とは言えないのではないか。

ごきげん保険

エヌ氏は日常生活での不満を訴えるだけで、保険金が下りるという契約を結んだ。野良猫で眠れないとか、砂糖入れが剝(は)げたとか、好みの女性に無視されたとか。政治への不満による心労、年齢による若さの衰えでも保険金が下りる。ただし、保険金が下りるといっても、一件当たり百円単位では、一体何の足しになるのやら。

対応する社員の心労は、極限に達している。それでも、顧客が毎月支払う金はかなり高いので、こまごまとした対応をしても、赤字になることはない。

エヌ氏は保険会社に日常生活での不満をぶちまけることで、

ストレス解消をしているのである。それが満足につながっている。シュールなドラマではあるが、見ている方が心労を感じてしまった。

桃源郷

無人探査機スタービジョンが、パル星探査に出かけた。人類がそのまま住める環境で、選ばれた者のリゾート地になると期待されていた。

ところが、パル星に到着すると、薄暗い空に焼け焦げたような風景、岩陰からは骸骨が現れた。強力な放射能が検知されたことから、核爆発が起きたことが分かった。火山弾がスタービジョンに衝突して、中継は中断されてしまった。パル星は桃源郷どころか、反ユートピアだったとして、人類によるリゾート化計画は頓挫したのだった。

実は、これはパル星に住む宇宙人が、スタービジョンに廃墟

の模型を見させ、人類による侵略を未然に防いだということだった。パル星は野山に花咲く、文字通りの桃源郷だったのだ。
　物語はここまでである。他の星からの訪問者が、善意を持つとは限らないのに、人類は地球の情報を無人探査機に搭載し、太陽系の果てまで飛ばしてしまった。これによって、人類は自らの手で侵略者を招いてしまったかもしれないというのだが。
　まあ、これはこの星が球形で、宇宙にロケットを飛ばしているという前提での話だが。月や火星の映像がフェイクであることが明らかになり、宇宙そのものの存在も、理論上の仮説でしかないのが真相らしい。

魔法の大金

まともに働かず、酒ばかり喰(く)らっていたエヌ氏は、お金に困って魔法に頼ることにした。黒魔術を研究して、悪魔を召喚(しょうかん)する方法を試みた。
　現れた悪魔に対し、エヌ氏は壱万円札を一万枚作るように頼んだ。それを銀行に持っていき、預かってもらうことにした。行員はどこでこの大金を手に入れたかと問い質した。というのも、持ち込んだ壱万円札はすべて番号が666666だったからである。これは悪魔の数字666を重ねたものであり、エヌ氏はまんまと偽札をつかまされてしまったのである。
　物語はここで終わる。エヌ氏は紙幣偽造の容疑で逮捕される

だろう。しかも、悪魔に物を頼むということは、魂を売り渡すことである。たとえ一時的に良い思いをしたとしても、自身の魂を売ってしまえば、悲惨な最期が待ち構えているのだ。

ささやき

火星帰りの青年は、地球の習慣が変わってしまったのに当惑している。どのように振る舞ったらいいか分からないので、無線のイヤフォンを装着した。その場面にふさわしい態度や会話を、ささやいてくれるサービスだった。

久し振りにバーで友人と再会した青年は、ささやきに指示されるまま振る舞うことで、すべてをうまくこなした。そこで、サービス会社に礼に行くと、指示していたのはコンピューターであることが分かった。

それだけではない。青年の友人たちも、ささやきのサービスに従っていたからこそ、パーティーがうまくいったことを知る。

もはや自由意志では行動できずに、ＡＩの指示に従うロボットと化していたのだ。

　便利なサービスに頼ることで、人間は思考能力を退化させて、コンピューターに支配されてしまった。スマホ中毒となった人類は、その予備軍というわけだ。

不満

　いやがる俺は、ロケットに乗せられて宇宙空間に放り出された。体温が下がっていき、死を待つばかりになった。気がつくと、蛙の顔をした宇宙人の星に、連れてこられていた。人道的な扱いを受けて、地球に送り返してくれるらしい。

　俺はいやだと言った。地球という星は危険だ。俺をこんな目に遭わせるのを見れば分かるだろう。あなたがたの星も危険にさらすに違いない。

　宇宙人は可能性を否定しながらも、地球を破壊するミサイルを開発する。発射ボタンを押すかどうかは、俺の判断に任される。俺が押したところで、語り手の正体が明かされる。宇宙に

放り出されたのは、実験動物の猿だったのだ。

語り手が人間ではなかったところが落ちである。今まで宇宙に送られた猿の多くは、窒息や高温、墜落などで死んでおり、科学的な実験とはいえ、動物虐待であることは否定できない。

無料電話機

ＮＨＫでかつて放送されていた「星新一ショートショート」シリーズの新作６編が、二〇〇九年の新春に放送された。アニメと実写によって製作されており、「無料電話機」は五分弱のアニメである。

お金を貸した男が、相手に返済の滞納を責める電話をかけている。この電話は一切無料だが、話の内容が盗聴され、そのたびに会話内容に関連したコマーシャルが流れる。ただより高くつくものはないという教訓で、一分間に何回も会話を遮（さえぎ）られたのでは、スムーズなコミュニケーションは成り立たないだろうし、個人情報を企業に奪われることにつながる。

ただ、プライバシーの問題に関して、現代人の多くは無頓着（むとんちゃく）のようである。しかも、会話に反応して現れるコマーシャルを、楽しんでいるようにも見える。サービスが無料なら安易に使用してしまう我々を、星新一はアイロニーを込めた眼差（まなざ）しで見つめているのである。

新しい遊び

これは星新一のショートショートを、アニメ化した作品である。人間はロボットを開発して、ロボット三原則というものを制定した。その一、ロボットは人間に危害を与えてはいけない。その二、ロボットは人間の命令に従わなければいけない。その三、ロボットは自分を守らなければいけない。

最初に製造されたロボットは、人間と同じ大きさだったので、掃除をさせたり、料理を作らせたり、留守番させたりと、ロボットを酷使することで、奴隷を使っているような罪悪観を抱かせた。

そこで、ロボットは小型化された。それによって、人間はロ

ボットを擬人化することがなくなった。暇を持て余した人間は、闘鶏や闘犬でも行うかのように、小さなロボットを互いに闘わせた。ロボットが身を守るよりも、人間の命令を聞くという原則の方が優先されたので、闘わせるたびにロボットは傷つき、壊れていった。

　それが残酷かという疑念も、すぐに打ち消されてしまった。小型のロボットはおもちゃのようなもので、人間が感情移入する余地はなかったからである。

　ただ、現実の世界を見ると、ロボットを人間に近づけさせ、実際には死んでいる政治家を、生きているかのように見せて国民を騙したり、人間から自由意志を奪ってロボット化し、支配層の奴隷とするための研究が進んでいるようである。

マイ国家

　銀行の預金勧誘員が、旧家を訪問すると、中で何かが割れた音がする。どうしたのかと中に上がり込むと、家の主人が酒の歓待（かんたい）をしてくれる。酒には痺（しび）れ薬が溶け込ませてあり、身動きが自由にできなくなる。

　主人は自分のうちは独立国であり、不法侵入した廉（かど）で処刑すると言い出し、刃物を振り回す。あわてた勧誘員は、主人をなだめようと、酒の相手をするのだが、今日は独立記念日だから恩赦にするとか、国家を侮辱（ぶじょく）するのか、やはりスパイだったのか、と主張を二転三転させる。ついに、銀行員は頭がおかしくなり、自分だけの「マイ国家」を作るという妄想に囚われる。

普通の国家は税金による搾取を行っている、という主人の主張は納得がいくが、一人一人が「マイ国家」を作るべきだという主張は、混乱以外の何ものでもない。国家というものは、集団の在り方の一つであり、現状の国家がいかに搾取に基づいて運営されているとはいえ、個人の主観だけで否定できるものではない。集団における連帯の問題を避けた「マイ国家」は、狂気の沙汰でしかないということだ。

古風な愛

一見すると、星新一の作風とは異なるドラマである。売れない俳優が、由緒ある家柄の女性と知り合い、恋愛関係となり、お互いに結婚したいと思うようになる。

ところが、父親は俳優のような不安定な職業の男に、大切な娘をやれないと言う。ついに、二人は心中を決意して、ホテルで毒薬を飲んでベッドに横たわる。

「ずっと一緒にいられるのね」

女はうれしそうにほほ笑む。毒薬を飲むと、抱き合ったままベッドに横たわる。ところが、しばらくすると、男はベッドから起き上がる。実は男は毒薬を飲んでいなかったのだ。俳優と

して、心中（しんじゅう）の場面を演じていたのである。

何でそんなことをしたのか。実は、女は不治の病に冒されており、父親は結婚を許さないことで、娘を心中という形で、最高の幸せの中で死なせてやりたかったというのだ。父親は男に心中を演じてくれたことで、約束の金を渡そうとするが、男は要らないとして拒絶する。女を愛して心中したかったことは真実であり、それまで演技だったということが、自分でも許せなかったからである。

ただ、こんな筋立て自体に、無理があるのも事実である。男は心中を装って女を死なせたとして、警察に逮捕されるはずである。心中もそんな甘っちょろいものではない。ナイフで娘が刺されるかもしれない。毒薬でも七転八倒して苦しむだろう。

二人の結婚を許してやり、妻としての喜びを味合わせてから、一日でも長く生きさせてやるのが父親の愛情というものだ。所詮は作り話なんだよという批判はあるだろう。

午後の恐竜

これはアニメ作品である。アニメでなければ、たとえＣＧを利用しても莫大な制作費がかかってしまう。主人公は妻と息子を持つ男性である。日曜日の午後、窓の外を見て仰天する。恐竜が街の中を歩いているのだ。しかも、街とジャングルが二重写しになっている。子供の前に現れた肉食恐竜に、「危ない！」と主人公は叫ぶのだが、恐竜には実体がない。蜃気楼のようなものらしい。

ニュースによると、これは世界的な現象で、時系列をたどるように、現れる恐竜も変わってくる。主人公は妻と息子を伴って、街の中を散策している。日が傾く頃には、空には始祖鳥

が飛んでいる。やがて新生代に入り、哺乳類が出現する。次いで、原始人、ついに、主人公の若い頃まで。

人間は死ぬ瞬間に、それまでの人生を走馬灯のようにたどる。それと同じように、地球にも最期が近づいており、地球の歴史を回想するように、それまでの歴史が幻像の形で現れているのだ。

何で地球が滅ぶのかというと、核戦争が近づいていることが示唆されている。すべてを悟った主人公は、妻と息子を抱き寄せる。最後の時が到来するのに身構えるように。

きまぐれロボット

博士の研究室をお金持ちのエヌ氏が訪れた。身の回りの世話をしてくれるロボットを譲ってもらい、別荘で働かせることにした。ロボットはおいしい夕食を作り、優美な女性に変身してエヌ氏を楽しませたが、突然、機関銃をぶっ放す。エヌ氏は命からがら逃げ出した。

　それ以来、ロボットは事件を起こすので、エヌ氏は代金を返せと博士に迫った。それに対して、ロボットは故障していない、あの方がずっと人間的で、人を退屈させないというのである。ロボットに人間の代わりをさせるなら、多少はきまぐれであった方がいいかもしれないが、機関銃をぶっ放すような物騒なロ

ボットなら要らない。

　ただ、現在は鋼鉄のロボットではなく、限りなく人間に近い動きをするロボットが開発されている。人の表情もまねるので、離れた位置にいたり、映像を通したりした場合、本物の人間と区別できない。余りに精巧に出来ているため、本物の人間の方がロボットに見えてしまいかねない。さらに、生身の人間をロボット化するために、マイクロチップを埋め込んで操作する研究まで行われているらしい。

夜の事件

遊園地の入口に案内嬢のロボットが立っていた。そこに地球を侵略しようとする宇宙人が現れた。宇宙人はロボットを地球人だと、思い込んでしまった。

まず、脅（おど）かすために笞（むち）で叩いたがびくともしない。銃で撃っても弾を撥（は）ね返してしまう。奥の手はスケベなおじさんのセクハラで、女の子の腋（わき）の下をくすぐるというものだった。

ロボットだから、当然何も感じない。それを見た宇宙人は、地球を侵略する意欲を失ってしまった。ロボットによって、地球は救われたという話である。

これは二十世紀の鋼鉄製のロボットだから、宇宙人を撃退で

きたのであって、人間のような繊細な動きをする精密なロボットだったら、笞で叩くだけで故障してしまうかもしれない。

３つの願い

男が氷結した湖に穴を開け、釣り糸を垂れていると、奇妙な壺が引っかかった。中から三つの願いを叶（かな）えてくれるロボットが出てきた。アラジンの魔法のランプから出てくる魔神の、ロボット版みたいである。

男が魚を出してくれと言うと、ワカサギが一匹出てくる。でかい魚と言うと、両手で支え持つほどのイトウが出てきた。最後に、この湖で一番大きな奴と言うと、巨大な怪魚が出てきて、湖の氷が割れて投げ出されてしまった。

教訓としては、願いはほどほどにすべきだということだ。僕が子供の時に好きだった「金の魚」も同様の話で、助けた金の魚におじいさんが願い事を言うと、新しいたらいが出てくる。おばあさんにそそのかされて、次に新しい家、貴族の生活、最後には海の神さまになることを願うと、元の木阿弥（もくあみ）に戻るという話である。

ねぼけロボット

宇宙船の中でアラームが鳴った。異常は貨物室で起きているらしい。どうやら、宇宙植物が侵入してきたようだ。蔓状（つるじょう）の茎に入れ歯に似た口がついており、何でも溶かしてしまうという。

手で駆除できないので、ロボットに登場願うことにした。出てきたのは、小咄（こばなし）をするロボット、料理のロボット、指揮者のロボット、踊りのロボットと、役に立たない物ばかり。人間に近い最高級のロボットを呼ぶと、起きたばかりで寝ぼけており、立ち小便をする始末。それでも、覚醒することで使命を果たし、宇宙船は無事に帰還したという話。

ここで、物語のような宇宙旅行が可能か考えてみよう。宇宙空間は真空とされているから、植物が存在することはできない。真空に投げ出された途端、粉々になってしまうだろう。また、宇宙船に穴を開けて侵入したとしたら、その瞬間にすべての物は、宇宙船外に投げ出されるはずである。

宇宙飛行士が宇宙船から外に出て、作業をすること自体不可能である。真空に出れば、宇宙服が破裂するだろうから。真空の中で炎を噴射しても、機体は移動することができない。もし移動できるとしたら、宇宙空間は真空ではなく、エーテルで満たされているんだろう。

文明の使者

博士は文明開発のロボットを開発した。助手のロボットを引き連れて、未開の星を目指した。着陸したのは猫の星だった。猫を文明化するのはハードルが高かった。そこで、まず猫を人間化することから手をつけた。

耳だけは猫のままで、服を着た猫人間ができて、社会を近代化したので、高層建築が建ち並ぶ現代の水準まで引き上げた。

これで当初の目的は果たしたとして、博士は猫人間の星を去ることになった。住民の代表が、お礼として銅像を造ったので見てほしいと言った。

博士はぎょっとした。そこに建っていたのは自分の物ではな

く、助手のロボットの銅像だったからである。所詮、猫を文明化しても、私の偉大さは理解できないんだと、博士はぼやく。実際に活動したのは、ロボットの方なのに。これは「博士とロボット」という作品と同工異曲である。

謎のロボット

博士の研究室には謎のロボットがいる。お茶も入れなければ手伝いもしない。役に立たないロボットをなぜ作ったのか、少年は不思議に思っている。そこで、さまざまないたずらをしたり、犬をけしかけたりしたのだが、ロボットは一向に何もしない。

一人になった博士は、ようやくロボットに仕事を命じる。日記を書くのが謎のロボットの正体だったのだ。ロボットに日記を書かせているなど、人には恥ずかしくて言えないというのだ。

日記を書くことの重要性に気づいているだけでも、博士は人間的である。現代の人間は、メールしたり、写真を撮ったりは

するが、その日に何をしたかという記録を取っていない。時間が経（た）てば、ほとんどの出来事は闇の中に消えてしまう。自身の記憶を持たなければ、生きてきたという時間の感覚も得られない。刹那（せつな）的に生きて、現在しか持たなければ、ロボットと大して変わらないではないか。

スパイキャッチャー

ハイテク企業に侵入し、幻の絵画を手に入れるのが、スパイに与えられた使命だった。二十世紀末の日本企業は、バブル経済の好景気で、海外の美術品を投機目的で買いあさっていた。
このアニメのスパイは、忍者姿なのになぜかネクタイをしている。サラリーマンもネクタイをしなくなった現在から見ると、古い物と新しい物が混在していた、いかにも昭和時代を感じさせる。
スパイは侵入防止のレーザーなどをかいくぐり、見事名画のある場所にたどり着くのだが、スパイ捕獲装置にはまりこんだ、百人目の獲物になってしまう。これが「スパイキャッチャー」という題名の由来である。

火の用心

発明好きの少年が博士の研究室に、鳥のロボットを持ってきた。火事を発見すると「火の用心」と叫ぶのだが、お姉さんがコーヒーを沸かしているのに反応してしまう。大きな熱源にしか反応しないようにして、消火装置をつけると、動力室に飛んでいって水をまいてしまう。

そこで、博士が改良を手伝ったのだが、鳥のロボットは太陽を目がけて飛んで行ってしまった。最大の熱源に立ち向かう火の鳥になったという落ちである。

現在は鳥そっくりに、滑らかに飛ぶロボットどころか、羽を目まぐるしく動かす蚊のロボットまで開発されている。それに

病原菌を運ばせたりしたら、とんでもない生物兵器ができてしまう。

科学は人間に幸福をもたらしてきたが、遺伝子組み換え技術で、癌を引き起こす食品から、パンデミックを引き起こすウイルスまで開発できるようになった。マッドサイエンティストに世界の支配層が資金提供して、人類の生存を脅（おびや）かしかねないところまで、事態は切迫しているのである。

襲来の目的

怪獣の乗ったＵＦＯが地球に襲来した。それに対して、地球人が平和主義者であることを示すために、反撃を控えて食べ物を差し出した。

ところが、怪獣の攻撃が止まらないので、博士は自身が発明したロボットと対決させた。火薬の量が多かったのだろう。怪獣は退治できたのだが、無数の花火が打ち上がってしまった。

数日後、再び、ＵＦＯが出現した。前回の攻撃は、地球人が危険な存在か調べるための試験だったというのだ。賞品として大量の飴玉を、地上に降らせて去っていった。

ＵＦＯが襲来する古典的なＳＦと言えば、ウェルズの『宇宙戦争』が有名である。火星人の襲来に対して、いくら平和主義者としての態度を示しても、攻撃が中止されることはないだろう。実際に、爬虫類型の宇宙人に侵略されていると唱える者もいるほどだ。

その一方で、地球人を助けてくれる宇宙人もいるらしい。プレアデス星人などは、北欧人のような姿をしており、不治の病を治したり、若返りまで可能とするメドベッドをもたらしてくれたという。その真偽については、ほどなく明らかになるというのだが。

薬

博士はノーベル賞を狙って、新薬の開発に取り組んでいた。ついに、若返りの薬を発明したのだが、誤って飲んでしまった。このままでは若返りが進みすぎて、赤ちゃんになってしまう。タイムマシンロボットを起動して、この部屋の時間だけを進めれば、元に戻れると思うのだが、リモコンに手が届かないうちに、赤ちゃんに戻ってしまう。

　そこに、秘書の女性がお菓子を持って帰って来た。女性の靴にリモコンのスイッチが当たり、博士は無事に元の姿に戻ることができたが、秘書の女性は老婆となり、お菓子は腐ってしまったという落ちである。

　中国の皇帝の場合、若返りのために水銀を飲んで、かえって中毒で死亡する例が後（あと）を絶たなかった。日本の昔話には、桃を食べて老夫婦が若返り、子供を作ったとか、滝の水を飲んで若返ったおじいさんを見て、おばあさんが飲み過ぎて赤ちゃんになったとかいう話が伝わっている。不老不死は中国人や日本人にとっては、究極の願いだったのである。

　若返りに関しては、欧米人も無関心ではなかった。ただ、黒魔術で赤ちゃんを犠牲にして、魔女が秘薬を作るとか、おどろおどろしい話が伝わっている。それは伝説ではなく、子供を虐待して抽出（ちゅうしゅつ）するアドレノクロムを、現代の政治家や芸能人も使ってきたという。ただし、一旦使用して中断すると、目の周りに痣（あざ）ができて、急激に老化が進むという。

番外編「きまぐれロボット」

これは星新一の「きまぐれロボット」の二次創作とも言うべき映画で、監督は辻川幸一郎である。博士のロボットをエヌ氏が借りるという設定は同じだが、エヌ氏が人間嫌いの小説家となり、母が死んで手伝いのロボットを博士に求めるという内容に発展させている。

エヌ氏が借りたロボットは、外見はいかにも昭和時代のロボットという感じで、動きがぎこちない。返答の代わりに、電報のようにプリントアウトした文字を吐き出す。当初はよく家事をこなしていたが、次第にきまぐれとなり、仕事をサボるどころか、手が外れてエヌ氏を追っかけ回すようになる。博士によ

れば、これはエヌ氏がぼけたり、運動不足になったりしないようにする設定だという。

このロボットには、「きまぐれ」と「すなお」というスイッチがあったが、エヌ氏はいじっているうちに壊してしまう。修理に訪れた助手の女性への恋に落ちて……。

最後に、どんでん返しがあるのだが、そこまで言うのはやめておく。星新一の原作はシンプルだったが、コミカルな人間ドラマとして表現することに成功している。

なお、演技の上で注目すべきなのは、エヌ氏の母を演じた夏木マリである。テーブルに向かって座っているが、すでに死亡している設定で、まばたきもせずに、押しただけで横に倒れてしまう。終始イライラして怒鳴り散らすエヌ氏は、浅野忠信が

演じている。昭和時代にはこんな男性にも、甲斐甲斐しく尽くす女性がいたものだが、現在ではロボットぐらいしか相手にしてもらえないだろう。